

演題番号：4

演題名：体表に黒色病変が認められなかった豚の悪性黒色腫

発表者名：○新垣貴野¹⁾、松川国洋¹⁾、阿左美有右²⁾

発表者所属：1) 北部食肉衛生検査所、2) 中央食肉衛生検査所

1. はじめに

悪性黒色腫は、メラニン色素を産生する細胞であるメラノサイト由来の悪性腫瘍で、広く各種動物に発生する。メラノサイトは有色動物の皮膚、口腔粘膜、網膜色素上皮・脈絡膜および髄膜などに分布することから、黒色腫は通常これらの組織に発生する。と畜検査においては、体表に黒色病変（黒変）があることで発見されることが多いが、今回、体表に黒変を認めず、脊椎、脊髄、筋肉、その他複数の臓器およびリンパ節（Ly）に黒変が認められた症例に遭遇したので、その概要を報告する。

2. 材料および方法

平成26年3月13日に管内と畜場に一般畜として搬入された茶色（品種不明）の雌豚1頭において、黒変が認められた脊椎、脊髄、頸部筋肉、肺、心臓、肝臓、脾臓、腎臓、胃、小腸、横隔膜、胃肝門Ly、内腸骨Ly、腸骨下Ly、浅頸Lyおよび鼠径Lyに、黒変を認めなかった脾臓、脾臓Ly、肺門Lyおよび膝窩Lyを加えた計20部位を材料とした。10%中性緩衝ホルマリンで固定後、脊椎はさらに（株）ファルマ製K-CX液で脱灰後、定法に従いパラフィン切片を作製し、HE染色を行った。特殊染色はフォンタナ・マッソン染色と過マンガン酸カリウム・シュウ酸法（以下、漂白法）を実施し、免疫組織化学染色は抗S-100タンパクポリクローナル抗体（ニチレイ）を用いた。

3. 結果

肉眼検査では、背割り後の脊椎（第三腰椎）に3.5×3cm大の黒変が認められ、触ると黒色が付着した。その病変部を中心に、周囲の脊髄硬膜も黒色化していた。脊椎以外の各部位の黒変は長径が0.2cm～1.5cmで断面も黒色化していた。脾臓、脾臓Ly、肺門Lyおよび膝窩Lyについては表面および断面に黒変は認められなかった。

病理組織学的検査では、脊椎および脊髄髄膜は、紡錘形、円形、多角形等多形性を示す腫瘍細胞が波状や敷石状に増殖していた。この腫瘍細胞は細胞質内に黒褐色顆粒を含有し、核は淡明な類円形～楕円形で、同様の腫瘍細胞は肉眼で黒変が認められた各部位でも認められた。黒褐色顆粒はフォンタナ・マッソン染色で黒染し、漂白法で漂白された。免疫染色では、腫瘍細胞の黒褐色とS-100に陽性の細胞が類似の色調を呈し判別できなかった。

4. 考察およびまとめ

本症例は、腫瘍細胞の形態および各染色法の結果から、メラノサイト由来の悪性黒色腫と診断した。今回の原発巣は、肉眼的に最大の病変を形成し、組織学的にも腫瘍細胞の増殖が最も顕著であった第三腰椎部の脊髄髄膜と推察された。悪性黒色腫は体表の黒色病変部を原発とすることが多く、過去10年間に当所で当該腫瘍と診断された55頭のうち、本症例を除く54頭すべてにおいて体表に黒色病変が認められている。今後は、本症例のような非典型例があることを念頭にさらに注意深くと畜検査を行っていくとともに、悪性黒色腫について検索し、データの蓄積を図っていきたい。